



広島県におけるバレイショ栽培 の歩みとその特長

(その2)

広島県立農業試験場園芸部長 船越 建明

4. 試験研究成果の概要

バレイショに関する試験研究は主として因島市重井町にある県立農業試験場島しょ部支場において行われた。当支場は暖地除虫菊の品種改良および栽培改善試験を行うために昭和10年9月に農林省西条農事改良実験所重井試験地として設立されたものである。

その後県、国の所属が変わったが、昭和26年に県に再移管された後は今日迄県立農業試験場島しょ部支場として南部地帯を対象とした畑作物、野菜、花きに関する試験研究を続けている。バレイショに関する主たる研究成果の概要は次の通りである。

・品種選定試験——奨励品種決定試験、新系統適否試験が昭和28年より開始され、昭和30年に「ウンゼン」、35年に「シマバラ」、50年に「デジマ」をそれぞれ県の奨励品種に採用した。

・生育経過追跡試験——春作では地上部の生育は5月中旬まで急激に行われ、その後は緩まんとする。匍枝は出芽始め頃から発生しはじめ、5月中旬頃まで増加し、以後は変化しない。塊茎数は4月下旬頃から増加しはじめ、5月中旬以降はほとんど変化なく、また、塊茎重は7月上旬にほぼ最高に達した。

一方、秋作では地上部重が10月下旬に、匍枝数が10月中下旬にそれぞれ最高となり、塊茎重は12月上旬まで増加することが確認された。

・肥培に関する試験——春秋作共に生育期

間中の温度は10～23℃の範囲にあり、出芽から塊茎形成開始までの積算温度は約500℃であった。体内養分の消長をみると、茎葉の養分含量は春、秋作共に窒素とりん酸は生育初期に最も高く、以後は漸減する。しかし、加里は塊茎形成期に最も高くなる。

養分吸収は春作では収穫期まで続くが、秋作では11月上旬までにほとんど終り、その後は体内移行により塊茎に蓄積される。

三要素の吸収量をみると窒素は秋作で多く、りん酸は春作で多い。また、加里は春作でやや多い程度であった。

花崗岩風化土壌における四要素の地力判定指数は窒素36、りん酸107、加里74、石灰77であり、りん酸の天然供給量が最も多かった。

三要素適量試験の結果から判定すると、a当たりの施肥適量は、堆肥100kgを施用した場合は窒素1.2kg、りん酸0.3kg、加里0.8kgであり、堆肥無施用の場合は窒素1.5kg、りん酸0.5kg、加里1.3kgであった。

窒素追肥の時期と量を組合わせた施用法試験では2/3を基肥、1/3を出芽揃時に追肥するのが適していた。加里の供給時期をかえて塊茎生産への影響をしらべた結果、春作では塊茎の形成と肥大に役立ち、秋作では主として肥大に役立つことを明らかにした。

・種いもに関する試験——春、秋作における種いもの萌芽に及ぼす温度の影響を調べるため、5℃、10℃、17℃及び30℃の条件で掘取直後から2週間処理した。その結果、春作

では低温処理で、また、秋作では高温処理でそれぞれ萌芽が早まった。

そして、同様に春作では高温条件で、秋作では低温条件で栽培すると次代種いもの萌芽が早まった。植付時期の早晚による次代種いもの萌芽性は春作ではほとんど差がなく、秋作では植付時期が遅れるほど萌芽も遅れた。また、同一植付期で掘取期を変えた場合、春、秋作共掘取期が早いほど掘取後萌芽迄の日数は長くなるが、暦日では春作は掘取期が早いと早くなり、秋作は掘取期が早いと遅くなった。

更に、春、秋作共に大きい種いもほど萌芽性が良いことがわかった。

生産力に及ぼす種いもの影響を見ると、種いもは大きいほど生産力は高く（20～80 gの範囲）、種いもの消耗は春、秋作共に匍枝発生期頃までであった。そして、早期に種いもを除去すると生育は晩生化したが、生育、収量への種いもの影響は春作では出芽揃期頃まで、秋作ではこれよりやや遅い時期までと考えられた。

。雑草防除試験——除草時期をバレイショの生産時期に合せて設定し、雑草の影響を特に養分吸収の面からとらえて検討した結果、水や光の関係も含めて除草時期はできるだけ早い方が合理的であることを明らかにした。除草方法としては春作では冬雑草と夏雑草に共に有効な土壌処理剤、また、秋作では夏雑草に有効で植付当時の高温乾燥という気象条件下でも除草効果が1ヶ月以上続くと共に腐植分の少ない土壌条件下でも移動性の少ない土壌処理剤が有効であることを明らかにした。

。浸透性殺虫剤の施用法試験——ウイルス

病の媒介昆虫であるアブラムシの寄生を防ぎ、ウイルス病を予防する目的で、土壌施用剤の効果を調査した。

その結果、ダイシストン粒剤の効果が高く、10 a 当たり 6 kg を植付時に種いもの上部に施用するとその後約 2 ケ月間アブラムシの寄生を抑え、結果として次代のウイルス病発病率を無処理の 1/3～1/10 に低下させることができ、非常に有効なことを明らかにした。

。そうか病の予防試験——連作によるそうか病を耕種的防除法を用いて抑制するため、灌水、完熟堆肥と硫黄華の施用効果について検討を行った。

そうか病は塊茎形成初期に塊茎に侵入するが、この時期に土壌を乾かさないように管理した場合、発病率は低下した。具体的には塊茎形成初期から約 3 週間、pF2.0 の多水分条件下で管理した場合、同様に pF2.5 と乾した場合に比べて明らかに発病率が低下したおり、特に秋作において有効であった。

次に完熟堆肥と硫黄華を同時施用することによって収量を下げずにそうか病の発病率を低下させることができた。具体的には 10 a 当たり完熟堆肥を 2 t、硫黄華を 3 kg 植溝施用する。しかし、連用がすすみ、土壌の pH が 4.0 近くにまで低下すると、塊茎に硫酸障害が発生するので、処理の効果はここまでであり、こうなった圃場は pH の矯正を行って栽培作物の転換を図る必要がある。

。全粒種いも利用による秋作の生産安定——生育後期の低温により生育が途絶え、収量、品質の低下がけ念される秋作の収量を高位安定させるため、全粒種いもを用いた早植栽培について検討した。

1 個重 20～60 g の全粒種いもを用いた場

合、切断種いもに比べて種いもの腐敗率は大幅に低下した。種いもの萌芽促進にはエスレル 500ppm+GA10ppm の内混合液に植付前に20分浸漬処理する方法が有効であった。この方法の外に種いもの曝光処理によっても萌芽が促進され、曝光+GA10ppm 処理は更に有効であった。

種いもの大きさは20gでは小さすぎ、40g以上では収量に差を認めなかった。そして、10mm以上の降雨があれば、8月上旬の植付でも十分に萌芽し、「農林一号」では萌芽後約1,500℃で生育を完了するものと思われた。

1個40～60gの小粒種いもを大量に生産するには、種いもをエスレル 150ppm+GA 5ppmの内混合液に20分浸漬後切断して植付けろ。10a当たり株数は約10,000株が適当であった。

5. 問題点と将来展望

広島県のバレイショの栽培面積は春、秋作合せて約1,700haである。この内春作はその一部に秋作の採種栽培が含まれるが、可成りの部分は自家用のため、問題点とすれば採種栽培の安定化（特に中、北部地帯における原種圃の設置問題）と加工用の面積拡大があげ

られる。中、北部地帯への原種圃の設置問題については、これまでこの様なとり組みがまったくなされていなかった地帯が対象であるため、防疫補助員の養成も含めて、長期的な見通しをもった対応が必要と考えられる。

加工用の面積拡大については、県内にポテトチップスのメーカーもあり、強く要望されている。この問題は栽培担当農家の経営面積が可成り大型であることが必要と考えられるため、大型農家の育成、作業の機械化、効率化等についての対応が必要と考えられる。

次に秋作についてであるが、秋作は春作に比べて農家経営に占める作物としての重要度が高い。従って今後も現状の生果栽培としての技術についてより高度なものを求めてゆかねばならない。しかし、問題点は山積している。栽培地域は沿岸島しょ部で、大部分の圃場は一筆面積の狭い緩傾斜の畑である。土壌は安芸津町を中心とするやや粘質の赤土から島しょ部の花崗岩質の砂壤土まで数種あり、これが生産物の収量、外観、品質に違いを生み出しており、結果として単価、生産性の違いとなって表れている。

加えて長年の連作により、そうか病に代表

常識法話

◇念書と賠償責任

瀬戸内のさる県の8個所の商工会議所を交通事故対策の講演で歩いていたとき、港のある会議所で、身なりの立派な社長さんが質問に立って、「私どもの会社では、従業員を雇入れるに当って念書を取り、事故を起した場合、民事上・刑事上の一切の責任を負い、会社にご迷惑を掛けませんという一札を取ってある。それでも、会社に責任がありますか」という内容である。

従業員の個人的な運転中の事故なら別だ

が、業務上の運行では、民法第715条で使用者が賠償責任を負うと規定されている。あなたの会社、あなたの従業員は、国会ではないから、念書を何枚取り交わしても、他人を拘束することはできないから、念書をとったとしても、賠償責任は免かれせんナと回答したら、会議所の職員らが嬉んで、料亭で接待を受けたことがある。その後注意してみると、この誤解は方々で見受けられた。

される土壤病害が多発する危険性をはらんでいる。その結果、これを抑えるため、塩基類の施用をひかえ、土壌 pH を低くおさえて栽培を続けているため、年々外観が悪くなると共に収量も低位安定化傾向にある。これは「農林一号」という秋作用としては休眠の長さや生産力の点で必ずしも最適でない品種を用いていることにもその原因があると考えら

れる。

これらの事柄が原因で関西市場における広島バレイシヨの評価は年々低下傾向にあり、量に加えて質の面でもライバルの長崎県に大きく水をあけられているのが現状である。

このような状況を考慮して、今後も特長のある良質な広島バレイシヨの生産を目指した技術開発を続けてゆく必要があると考える。

いも・つれづれ草

〈ボン・ヌフ〉

大学の休みを利用してヨーロッパを回った息子が、スポンサーへの心遣いか、セーヌ川にかかっているボン・ヌフ橋やその袂にあるアンリ4世の写真を撮ってきた。ボン・ヌフは「新橋」の意味であるが、実はパリー1番の古い橋で、アンリ4世時代の1603年に落成したもの。アンリ4世がフライドポテトを好んだので、アンリ4世の像のある橋にちなんで、人びとはその好物をボン・ヌフと呼ぶようになった。

ボン・ヌフことフライドポテトは、昔ボン・ヌフ橋付近の屋台店などで売られていたが、今もパリーの街角で人気が高い。わが国のカウチポテト族はチップスが大好きのようなが、パリーっ子はボン・ヌフと言う揚げポテトが大好き。

揚げポテトの形にはいろいろあって、薄く輪切りしたポテトチップスもその一種。1cm角の拍子木に切ったものがボム・フリットで、これより少し小ぶりにしたのがボン・ヌフ。さらにもう少し細めにミニョネット(ステック)、もっと細くマッチの棒状にしたのがアリュメット(シューストリング)となる。この外、ダイス状のオブラインもある。粉吹きジャガイモのカロリーは御飯の半分ほどで、美容食となるが、油で揚げたのはカロリーが高い。欧米の中年女性はわが国の女性に比べ体重の豊かなのが多いのは、揚げもの好きに関係あるのかも知れない。

サマセット・モームの『三人の女』にもフレンチフライが大好きな女性が出てくる。太り過ぎて悩む3人の女性が、食事療法に励もうということになり、バター塗りトーストや甘い飲物を控えて我慢する。3人ともトランプ遊びが大好きで、もう1人の痩せた女性をメンバーに加えることにした。この女性、3人の前でフライドポテトなどをムシャムシャ食べ、クリーム入りのお茶を飲み続けたからたまらない。ついに3人は我慢しきれず、怒り狂い、泣きわめくことになる。痩せた女が帰ったあと、飢えた狼のようにビールを飲み、フォグラ、エクレーなどを口に突っ込む……と

言う話であった。

〈じゃがいもと映画—その4〉

○さらばバルデス

1973年、米・仏・伊合同作品。1880年代アメリカはニュー・メキシコ州における話。荒野の一軒家に飼われていた混血馬に乗っているルイーズ(ジル・アイアランド)に向かってチノ・バルデス(チャールス・ブロンソン)が投げた言葉、

『ジャガイモをつめた袋でもないだろう』

これは、乗馬がサマになっていないことを言っている。つまり、両足の膝で馬の腹をしっかり締めてもいないし、両足に体重をかけてもいないのを見て、ブロンソンが馬鹿にしている。

ジャガイモからの連想は、どの国でもよくない。ヘミングウェイの短編『キリマンジャロの雪』でも、「……ふと立ち寄ったカフェでは、あのアメリカの詩人が、前にコーヒーの皿を積み上げ、ジャガイモみたいな顔に、まぬけな表情をうかべて……」というのがあり、阿刀田高のある文にも、「公園のベンチはもちろん、電車の中や喫茶店などでベタベタしている2人連れをよく見ると、女は水準以下のご面相。男は芋でも飲み込んだような馬鹿づら。……日本の抱擁シーンはまだ揺らん期で、やがて美しく変貌する日が来るだろう」とあった。

この芋は何芋か知らないが、英語からも拾ってみると、

ポテト・ノウズ……魅力的でない鼻のこと。

スモール・ポテト……取るに足りない、つまらぬもの。つまらぬ人。

ミート・アンド・ポテト・マン……肉の取り合わせにはジャガイモしかないと思っているような、単純で面白味の欠ける、真面目くさった人をいう。

こんなジャガイモであるが、ふるさとの香りが豊で、内に秘そめたのがあり、個性的で味のあるものに使うこともある。戦中派はジャガイモから「代用食」、「戦争」(戦中、戦後)、「開拓」などを連想し、若くなると、「土」、「素朴」、「故郷」、「美容食」を連想する人が多くなる。

(北海道立中央農業試験場 主任研究員 浅間和夫)